

矢作川流域圏懇談会「第1回全体会議」開催報告

1. 実施概要

(1) 実施概要

○実施日時：平成24年8月3日(金)
13:00～16:00

○開催場所：
豊田産業文化センター 大会議室

○参加者：99名（傍聴者含む）

(2) 内容

【会議議事】

1. 全体座長あいさつ
2. 全体会議出席者について
3. これまでの活動経緯及び今年度運営方針
4. 部会報告
5. 意見交換
 - (1) 各部会の活動方針について
 - (2) 山・川・海部会で調整したいこと



会議風景（1）



会議風景（2）

2. 主な会議内容

第1回全体会議では、これまでの各部会WGの活動報告を行った上で、各部会の活動方針及び今後、山・川・海部会で調整したいことについて意見交換を行った。会議で話し合われた内容は以下のとおりである。

- 部会座長より提案のあった全体会議の参加定員の増減については、了承された。
- 山・川・海部会の今年度の運営方針は了承され、今後、運営方針に基づき、取り組みが行われることになった。
- 取り組みにあたっては、市民の力ですべて解決するメニューと、市民がバックアップしてこそ行政が解決できる問題の二つがあり両方を後押ししていくものとした。
- 今後の流域連携に向けては、思いやりや価値観、流域内フェアトレードをキーワードとして検討を進めていくものとした。
- 次回、第2回全体会議は、平成25年2月18日午後開催することが決定した。

3. 議事概要 (・ ご意見、提案 ▶ 回答)

(1) 座長あいさつ 名古屋大学大学院工学研究科教授 辻本 哲郎

(2) 全体全体会議出席者について

事務局より全体会議出席者の参加定員の増減の提案を行了承された。

(3) これまでの活動経緯及び今年度運営方針

(4) 部会報告

山、川、海部会座長より、これまでの地域部会の動き、今年度の部会運営方針、今後期待する成果について報告された。

- ・ 山部会から、山は広くていろいろな県にも広がっていることなので、次回から会場の真ん中に流域の地図でも置いて、川の支川、小流域などがわかるようにしてほしい。(辻本)

(5) 意見交換

○各部会の活動方針について

- ・ 川部会の報告を受けて、随分、散漫な話になってしまったと感じた。今、矢作川水系で一番大事なことは、アユの産卵数が減ってきたことであるが、その問題には触れられていなかった。土木工学を行う国交省が結論を出してもらいたい。(新見)
- ・ 3部会とも流域全体で議論することが必要といたくくりになっているのは大賛成である。国会でも水循環基本法が議論されているが、このような視点で物事を考えていかなければならないと思う。矢作川流域圏懇談会においては、山・川・海でそれぞれ視点を絞って議論を既に行っているため、その議論を水循環という視点で議論することによって、議論が分散せずにいい方向に収束するような下地ができていると感じた。愛知県では、水循環再生地域協議会の中で水循環を議論しているので一度、ホームページを見てもらいたい。(柴田)
- ・ 里の部分については川部会に入っているが、上水とか工業用水を持っている団体が入っていないので見直す必要があるのではないかと。今後、取り組みの達成にあたっては、市町村や県の広域連携や協定、あるいは共通の条例をつくるなどしていく必要があるのではないかと。(本守)
- ・ 懇談会の役割の図について、取り組みを行っていく中でオレンジの部分が増えていくが、それは、取り組みが始まったということで課題が解決した訳ではない。課題解決に向けてはどんなふうに行っていくかは大きな残された課題として考えていく必要がある。(辻本)
- ・ 海の問題で赤潮や青潮の問題について抜けているのではないかと。(井上)
- ・ 山・川・海部会の中で取り残された課題があるという意見がいくつか出たので、各部会でどのように取り組んでいくのか説明してほしい。山の問題については森林を中心にした話だけであったが、豪雨災害に対する防災の問題とか網羅的な視点から取り組めていない問題もあると思う。(辻本)
 - ▶ 山に関係しているところは水循環であると思う。水循環は非常に重要な観点で、自然の水循環を人間が人為的に改変してきた結果、不健全な水循環ができてきた部分があるので、できるだけ自然の状態に戻せるものは戻すのがいいと思う。また、森林に特化している話については、森林の話というよりも人と地域(山村再生)の問題からスタートさせている。山村再生といった本質的な問題解決に向かおうとすれば、問題が

どんどん広がってしまうため、既に行われているすぐれた取り組みの情報共有、分析から行っていきたい。(蔵治)

- ▶ アユの産卵床の問題は、本川モデルの核となる部分であり、川底をどうしていくかなど本川モデルWGの中で議論して頂きたい。ただし、川底の話は局所性があるので、それぞれの場所で議論していかなければならないと思う。一方、このような場所には、川底の話の他、上下流をつないだ話として土砂をどう考えるかという話もでてくる。また、現在ではカバーされていない問題の方が圧倒的に多いので、それをどうカバーするのも課題である。(鷺見)
- ▶ 赤潮や貧酸素の問題を取り上げるべきという話であるが、このような問題に関する理解が進み、共通認識ができたので、どのような土砂や水が必要なのかという議論をするべきというようになったのではないか。また、土木工学の話がでたが、何か事業を行う時には、市民が共通認識をもち、こうゆう方向でいくべきだというバックアップがあるからこそできるのではないか。(青木)
- ・ この懇談会では、市民とのつながりを大事にしながらボトムアップでやっていくということは非常にいい方向だが、それが市民の力ですべて解決するメニューと、市民がバックアップしてこそ行政が解決できる問題の二つがあり両方を後押ししているという説明がなされた。当面は、本日の部会報告がなされた取り組みを行っていく。部会 WG については、頻繁に開かれており、行政や関係団体、市民もそこでしっかり発言されて、さらにもまれることを期待して、それぞれについての議論はそろそろ終えたいと思う。(辻本)

○今後の山・川・海部会で調整したいことについて

- ・ 山・川・海のつながりをどうするかについても意見を頂きたい。(辻本)
- ・ 産卵床の話については、流域圏懇談会で議論するのではなく、土木工学の人である豊橋河川が行えばいいという考え方である。一方、流域圏懇談会でやってほしいことは、上矢作ダムの水没予定地の地域振興、水没予定者への支援をおこなってほしいということである。(新見)
- ・ 例えば、荒れている山を何とかすることによって下流側にすごくメリットがあるという状況があれば、それまで成り立たなかった事業が成り立つのではないか。(青木)
 - ▶ 価値をつけるということか。矢作川だと矢作ダムに土砂がたまっているが、その土砂を利用したい人があれば、流域全体としての価値観が出てきて事業化できるということか。(辻本)
- ・ 山は下流域を思いやる、下流域の方は上流部を思いやるという、「思いやる」というキーワードがあるのではないか。例えば、大津波がくると予想されたとき、根羽村に住んでくださいというのが海の人に対する思いやりである。川の人が上流を思いやるのであれば、山にある木を使ってもらおうということ。これにより、山の間伐が進んで、森林整備が進むことで水資源の安定供給が可能となる。互いの地域がどうやったら思いやることによって成立していくのか、そんな視点を一つ入れて考えてもらいたい。(今村)
 - ▶ 活動をひっぱるのは、貨幣価値的なものではなく、思いやり。ただし、思いやりだけでは動かないので思いやりと価値観をうまくくっつけながら、いろんな意味での価値を

見いだしていくことが大事だと思う。(辻本)

- ・ 土砂の話について、もう一回みんなで情報を共有して、それぞれの部会の問題として土砂のことを考えるということが、これから山・川・海のつながりを流域で意識できるかどうかの転換点になると思う。また、海部会の流木問題に興味を持ったが、矢作川からでくるとするとどこから出てきたものなのか分かれば教えてほしい。(洲崎)
 - 流木は、漁業者がかなり困っている問題として、上流との関わりもあるということで選んだが、どこからくるかは分からない。(青木)
- ・ 例えば、矢作川では明治用水よりも下流の河畔林、支川の河畔林などの整備をすると、三河湾の漁業者が流木に悩まされる量が減るとか、そういう提案につながられる結果を協働の調査で得られれば、一つの成果にもなると思う。それと、以前、鈴木先生にお話頂いた海自体の健康さがよみがえらないと、山をよくすることで海をよくすることはできないとい話をここでしてもらいたい。(洲崎)
 - 海では、赤潮や貧酸素の問題は、伊勢湾再生推進会議の中で一定の結論がでている。具体的には、干潟、浅場、藻場をなくさないこと、過去に喪失した部分は、人の手で修復すること。また、干潟、浅場、藻場といった場所が壊れてしまっているから、今の段階では、水量だけを増やしても海はもとには戻らない。そのため、環境を修復した上で、水量や栄養塩をもっと出してほしい。(鈴木)
- ・ 全体会議として、部会がこのようなペースで活動を進めて頂くことでよいか。(辻本)
 - (了承)
- ・ 思いやりと価値観で流域としての連携を深める意味をしっかりと見極めていくことが大きな結論だったが、他に海から山、山から川、川から海に対して要求したいことがあるか。(辻本)
- ・ 山から海までをどうつなぐかは流域内フェアトレードだろうと感じている。流域内でも豊田市は大きな森林も抱えているが、安城市より下のところには山がない。流域でまとめてもっと木を使おうということに対して具体的な支援を考えていくことで、流域の住民の暮らし方から変えていこうという提案にもつながっていくと思う。(丹羽)
- ・ 流域圏住民はもともとつながっていたことを思い出すことからスタートしようと山地域では考えてきた。また、そのつながりをどう回復するかということが山部会の提案だと理解して頂きたい。(黒田)
- ・ 連携については、もともと流域住民であるというのも一つの観念。フェアトレードという考え方も、上から下へ、下から上へということも一つの考え方。思いやりというものも連携を支える一つの考え方だし、条例みたいなもので縛るのも一つのやり方。それから、価値を見出していくこともキーワードとしてしっかり認識しながら活動を進めてほしい。(辻本)

(6) その他

次回、第2回全体会議は平成25年2月18日午後を開催することで決定。また、愛知県より、三河湾環境再生シンポジウムについての情報提供があった。

以上